社会とつながる機会増える

本年度「eスポーツ部」が発足

肢体不自由の児童・生徒が通う茨城県立水戸特別支援学校（宮山敬子校長、児童・生徒182人）で、本年度「eスポーツ部」が発足した。6月には高等部の生徒がサッカーゲームの大会に出場。「障害」の有無を超えて、勝負に挑んだ。

茨城県立水戸特別支援学校

コンピュータゲームでの対戦を競技的に取り組む「eスポーツ」。激しい運動を伴わないため、従来のスポーツと比べると、身体的特徴や障害の有無が影響しづらい。

近年では学校の部活動でeスポーツに取り組む動きが出てきた。作戦を立案するための思考力や、それを仲間と共有するためのコミュニケーション能力の向上が期待できる。パソコンを使うため、デジタルリテラシーも身に付くとされる。

生徒の働き掛けで誕生

同特別支援学校のeスポーツ部は、興味を持った生徒が教員を説得し創設した。創部に尽力したのが、部長を務めている伊藤航世さん。3年前、eスポーツについて知り、「これなら自分でもできそう。大会などにも出られるのではないか」と思ったという。

昨年度末に卒業していった長島利樹さんと一緒に、eスポーツのメリット・デメリット、必要なものなどを調べ、教員の前でプレゼンに臨んだ。

作戦を考える力やコミュニケーション能力、与えられた役割を遂行する能力の向上が望める他、手指の運動の訓練にもなることを伝えた。

教員や他の生徒にもeスポーツに触れてもらおうと、校内で小規模な体験会も実施した。教員からの反対もなく、保護者からは期待の声が上がり、創部に至った。

大会出場

力合わせ健常者と対戦

コミュニケーション力、自信培う

同部は6月に開かれた「全国都道府県対抗eスポーツ選手権2021MIE」の茨城県大会に参加した。

部員たちは月2回の練習や大会直前の特訓期間を経て本番へ。出場した全チームが初戦敗退となってしまったが、得られたものは大きかったという。

伊藤さんとのペアで参加した黒沢颯汰さんは「大会に出られたこと自体がうれしかった」と話す。「足に障害がある中で、大会というものに出るのは初めてだった。多くの観客の前でプレーしたことや、健常者と対戦したことは、いい経験になった」と話した。

eスポーツをやって良かったことを尋ねると、部員たちは口をそろえて「コミュニケーション力が上がった」と答えた。中でも瑠夏さんはeスポーツを通して、行動や考えに自信を持てるようになったという。

「自分の提案したアイデアがうまくいくとうれしい。自分たちだけで課題発見から解決策を考える力が付いたと思う」と自身の成長を実感した。

部長の伊藤さんは「eスポーツはオンラインであらゆる場所とつながることができる。今後は他の学校との交流戦もやってみたい」と、これからの活動の展望を示した。

手指能力の向上も

eスポーツ部を指導する教員にも話を聞いた。

教育的意義について、石原康英教諭は「コミュニケーション能力だけでなく、マナーや感謝の気持ちというのが身に付いたと思う。手指能力の向上も見られた」と話した。

技術面の指導を行っていた斎藤光教諭は「全員がコントローラーの操作に慣れているわけではなかったので、そこからの指導だった。もともとプレーしたことのあるゲームだったが、技術を指導しようとすると練習が必要だった」と苦労を明かした。

宮山校長は「eスポーツを通じて、子どもたちが社会とつながる機会が増えた。テクノロジーの進歩で、障害を障害と感じなくなるような世の中が来るのではないか。そのような可能性を子どもたちが感じさせてくれる」と話した。

◇

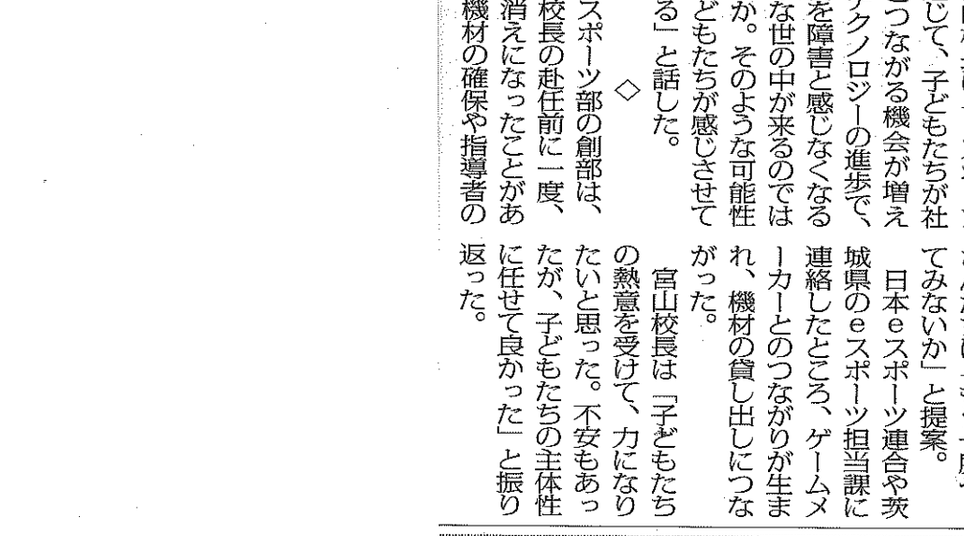
eスポーツ部の創部は、宮山校長の赴任前に一度、立ち消えになったことがある。機材の確保や指導者の不在が課題になった。今回創部まで至ったのは、機材の貸し出しを受けられるようになったからだという。

宮山校長は以前から、肢体不自由児のスポーツについて関心を持っていた。同県の特別支援学校長会で、障害があってもできるスポーツの模索を提案。前年度から数校で実践研究を行うことになった。

そのことを校内で共有したところ、eスポーツ部の立ち消えの話を聞き、伊藤さんたちに「もう一度やってみないか」と提案。

日本eスポーツ連合や茨城県のeスポーツ担当課に連絡したところ、ゲームメーカーとのつながりが生まれ、機材の貸し出しにつながった。

宮山校長は「子どもたちの熱意を受けて、力になりたいと思った。不安もあったが、子どもたちの主体性に任せて良かった」と振り返った。



「全国都道府県対抗eスポーツ選手権2021MIE」に参加したeスポーツ部。右から斎藤光教諭、長島利樹さん、伊藤航世さん、内田聖渚さん、内田瑠夏さん、黒沢颯汰さん、石原康英教諭